

---

# HEROES インフィニット・ストラトス

D1198

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HEROES インフィニット・ストラトス

### 【Nコード】

N3504Z

### 【作者名】

D1198

### 【あらすじ】

記憶を失ったオリジナル主人公がIS学園で生活する話です。オリ設定、オリ人物、性格改変、ハーレム、ご都合設定等々多数あります。

基本的にオリ主視点。文字は多め。

これは好かん、と思ったらお戻りくださいませ。

因みに同名タイトルの海外ドラマとは全く関係無いです。

2011/12/23

## プロローグ

伊豆半島南端、石廊崎から南へ約40km。神津島近海。洋上より1・2km。時刻は18時24分。太陽が空と雲を赤紫色に照らすその幻想的なキリングゾーンに俺達は居た。

「一夏！そっち行つたぞ！」

銀色のISを狩り損ねた俺は一夏に向かって叫んだ。バーニア全開で次第に青から黒くなりつつある海と銀色の背中和白いISを視界にとらえる。奴まで約800m、俺は撃ち出した14発全弾を奴の背中にだけ当て牽制をする。

「うおおおお！」

右手に持つ蒼銀の剣をかざし一夏は奴との距離を一気に詰めた。

俺は直ぐさま空を切つた一夏を狙う奴の頭を狙撃し援護する。

「ちくしょうめ！しぶとすぎだぜ！」

最大速度で奴との距離をとつた一夏が吐き捨てた。一夏と俺は中央に奴を見据えながらせんに距離を維持する。

「豆鉄砲（アサルトライフル弾）じゃ奴への牽制がせいぜいか！くそ！」

俺も堪らず悪態をつく。愛機の「みや」がアサルトライフル弾（12・7mm）の残弾が残り1カートリッジ（20発）と警告してきた。

俺が奴の足を止め一夏が必殺の一撃を放つ。もう幾度となく繰り返したが、奴を捕らえる事が未だ出来ていない。原因は俺だ。足止めるのに必要な火力が不足しているのだ。一夏と合流前にアーマーピアシング弾（20mm）使い切ってしまった事が悔やまれてならない。自分の迂闊さが恨めしい。

「どうする真！このままじゃジリ貧だぜ！」

奴の攻撃をどうにか躲しつつ一夏が俺の焦りを代弁してきた。みやが示す僚機ステータスを見ると白式のエネルギーは既に4割を切っている。一夏の言うとおりこのまま続ければ2人ともやられる事は明白だ。更に日没までもう時間が無い。俺はともかく夜間の戦闘経験が無い一夏には状況が悪すぎる。

俺は兵装一覧のそれと洋上をちらと一瞥した。俺の意図を察したみやが情報を補完してくる。俺は腹を決めた。

「一夏！仕掛けるぞ！」

俺らは全力で海面に向かっていった。後方の奴をHセンサーで捕らえながら、海面で俺が隙を作る、と一夏にそれだけを伝える。一夏は軽く頷いて離脱した。

急に視界が黒い海で狭くなる。海面に立った俺はみやに黒釘（120mmカノン）を量子展開させる。あざ笑うかのように奴は頭上から致死の雫を浴びせてきた。幾つもの衝撃と水柱の中、俺はそれに構わず狙いを定めた。今は一夏が居る事を奴は忘れている。

有頂天の奴を一夏が切りつけ、その怯みに通常弾（APFSDS）を見舞った。俺の持つ最大級の攻撃だ。轟音と閃光が一瞬辺りを支配し弾は奴を掠めた。ダメージは殆ど無いだろうが、それで十分。奴はこいつの威力を知った。餌は完璧。

「おいおい、あれだけ激しくした相手に冷たくねーか？つれないねえお嬢さん」

俺のぼやきを聞いたか銀のESが俺に急接近してくる。同じ無視できない攻撃力ならば死に体の俺を先に仕留めるか、正しい判断だ。だがそいつが命取りだぜ。

奴は上空から海と空の極で方向を変え、一気に距離を詰めてくる。

奴を静かに見据え黒釘を構えると、みやが特殊弾の装填完了を告げた。俺が躲しきれない距離まで近づいた奴はその死の翼を広げ形容できない不気味な声を上げた。きつと奴は俺を捕らえたと確信したのだろう、けどな。その瞬間奴の足下で水柱が爆発的に立った。ありったけのグレネードをリモート爆発させたのだ。この辺は適度に浅瀬でな、仕掛けは容易かったぜ。

飛沫に巻かれた奴が逃げようとするがもう遅い。

「覚えとけ、水は案外重い。」

自由が効かない奴を捕らえ俺は引き金を引いた。今度は正真正銘、最大火力だ。発射された特殊弾頭は空気と水を励起させながらコンマ秒で奴に達しその力を一瞬封じる。それで十分だ！

「やれええええ！いちかああー！ー！ー！」

「今度は外さねえええー！ー！ー！ー！！！」

俺の叫びを合図に、閃光の如く一夏がその力を奴に解き放った。

思い出と言うものは存外いい加減な物だと思う。時と共に曖昧になるし自分の都合に合わせて書き換えることすらある。きつと郷友と語り合う思い出も実はちぐはぐで、内心差異を指摘しあっているに違いない。

こんないい加減な物であるけれども、人にとっては重要で文章に画像に、動画にと記録に勤しむ。考えてみれば、他人と共有する記憶が思い出であり、思い出というものは人との繋がりその物であり、人は1人で生きていけないと言うならば、なるほど重要に違いない。思い出を失えば親しい人が他人になってしまうのだから。

では個人の記憶が一切無い上に周囲の人も当人を知らない、この様な状況において人はどのような心境を持つのだろうか。世界に自分1人のみだと孤独感に襲われるだろうか、それとも全てに恐怖し絶望するだろうか。

私はこう思う。逆に開き直って新たに人生を歩み始めるだろうと人は問うだろう何故断言できるのかと。それにはこう答えよう、それは私の事なのだから。

IS学園1年2組所属。16歳。暫定名、蒼月真。  
これは思い出を無くした私がいま持つ全てである。

「なら蒼月君は暫く家から通う事になるんだ。」

「ああ急だったからな。寮の準備が間に合わないんだと。静寂って呼んでいい？」

「だめ。」

「ね、ね、真君ってどこに住んでるの？近く？」

「三崎口駅の近く、15分つてところ。本音って呼んでいいかな？」

「ここからだと遠いねー。」

「スルーとは酷い。」

私は自分の席で知り合ったばかりのクラスメイト2人と、僅かでも親しくなろうと悪戦苦闘中だ。その2人は鷹月静寐、布仏本音と言った。中々に手強い2人であるが、こうして会話が出来るだけ随分と気が紛れる。クラスメイトが全員女と言う事がこれ程しんどいとは思わなかった。

入学式が終わり自分のクラスにやっこの思いで辿り着いたのが20分ほど前。クラスに唯一の男子生徒である私は到着早々女生徒達から手荒い歓迎を受けた。好奇、嫌疑、その他諸々の感情を含む、29人分、58の視線に晒されたのだ。それは予想以上に厳しく、処刑場で加害者を見る遺族の視線とは言い過ぎかもしれないが、それ程強烈な物だった。

これは堪らんせめて一般的な会話ができる仲を、と私は片っ端からおはようと声を掛けたのである。その甲斐あって先の2人と雑談を交わす程度の関係を得ることができた。挨拶は人間関係の第一歩とはよく言うものだが、早々に話し相手を得る事ができたのは幸運だろう。もっとも他の女生徒からの視線はこの瞬間でさえ止むことは無いが、今はこの2人に専念した方が良いと思う。我慢のしどころだ。

それにしても随分と質の異なる2人と知り合ったものだと思う。鷹月さんは挨拶をしたとき小さい声でどうも、と一言あったのみだったので内気な娘かと思った。だが今では気兼ねなく話しかけてくる。案外人見知りなのかもしれん。布仏さんは温和で一見親しみやすく感じるが、人との線引きはしっかりしているようだ。気安く踏み込むと確実に拒絶してくる。そう簡単に心を許してくれそうに無い。そのような2人の共通点は、随分としっかりしていそうだ、

と言う事であろうか。

ところで、と鷹月さんが姿勢を正して聞いてきた。

「おう、何でも聞いてくれ。でも体重は男の子の秘密だぜ。」

「ばか。聞きたいのはISを動かせた理由なんだけど、結局どうだったの？」

布仏さんもそう言えば、とその目を俺に向けてきた。

「ああそれね。結局何も分かっていない。あれだけ調べまくったのになあ。」

「IS学園の検査でも？」

「ああ。専門の先生も頭抱えてたわ。結局はISコアに落ち着くんだとさ。」

未だコアは解析できていないものね、と呟く鷹月さんに布仏さんがこう続けた。

「謎々のコアさんに聞いてみるしか無いねー」

私は思わず苦笑した。彼女の言葉には無く実際そうする他手段が無いと思われたからである。

IS、インフィニット・ストラトスと呼ばれるパワードスーツは問題が2つある。1つは女性にしか扱えないこと。もう1つはISの基幹部品「コア」がブラックボックスなのである。

今まで女性にしか扱えなかったそのISだが、最近になって動かせる男が2人見つかったのだ。言うまでも無くそのうちの1人とは私の事で、調査にも関わらず原因は不明。ならば原因はコアしかない、と言う訳である。

今更言う事でも無いのだが、既存兵器をガラクタにしたこれがよく解らないまま使われているのは恐ろしいと思う。男が動かせた理由、何事も無ければ良いのだが。



「言つたら、何でも聞いてくれ」

ふと布仏さんの視線を感じ私は彼女を促した。彼女は先程から自身の疑問を聞いて良いものか判断しかねていたようだった。私が言うや否や彼女の顔がぱあと明るくなる。実に和む笑顔だと思う。ただ彼女が躊躇った質問は少々困ったものだった。

「真君の家族はどうなのかな？お母さんとかやつぱり適正高いの？」

「家族、か。あーそれはな、それはなんつーか・・・ない。」

「無い？低いじゃ無くて？」

私の歯切れの悪い回答に鷹月さんが聞いてきた。布仏さんも分からないと言つた顔だ。私には記憶が無い。当然家族と呼べる人達を知らない。私自身殆ど気にしていないのだが、気の良い彼女らはそう思わないだろう。まだ間もない彼女らだ。誤魔化すべきだ。だが何故だろうか、彼女らに嘘をつくのは嫌だった。

「覚えてないんだ、身内のこと。」

悩んだ末私は正直に答えることにした。出会ってまだ間もないけれども、彼女らならそれを理由に距離を置かれることは無いだろうと考えたからである。

「ごめんなさい。」

一転、布仏さんが今にも泣き出しそうな顔で謝罪をしてきた。鷹月さんも神妙な顔をしている。

「いや、気にしないでくれ。俺も気にしてない。そんなに気にされると逆に俺が気にするって。」でも、と続ける布仏さんに私は手で制止し、続けてこう伝えた。

「知らないってだけで、どこかで生きてるかも知れない。世話を焼いてくれる人も居るから1人って訳じゃない。だから寂しくない。更に、」2人を見据えて私は笑いながらこう告げた。

「更に優しい友人が2人もできた。」

そつだ。私を氣遣つてくれる彼女らに嘘をつくのはあり得ないだろう。

どう反応したら良いのか分からないのか、きよとと2人が互いに目を合わせた。「そうだな、それ程気に病むなら代わりに今度デートしてくれ。それでチャラにしようぜ。ああ勿論3人でな。」暫しの沈黙の後、私のにやついた顔を見て理解したのか2人は眉を寄せた。

「真君ひどいよー本当に心配したのにー」

「待て待て、その場を和ませようとな。」

「心配して損した。」

「悪かったって！というかその眼怖いから！」

どうにか彼女らの機嫌を取り戻せたらしい。怒っていてもその雰囲気は和らいだ。ならば平謝り位なんという事はない。しかし怒っていても可愛らしい布仏さんに対し鷹月さんの冷ややかな事。この娘に冗談は控えた方が良くかもしれん。私は本当に良い友人を得たようだ。

そしてIS学園とはそのISを学ぶ世界唯一の学校である。その女ばかりの学校に今私は居る。

## 01-02 ショートホームルーム

「相川清香15歳！乙女座のO型！好きなことは体を動かすこと。好きなタイプは誠実な人！ハンドボール部入部予定！みんなよろしく！」

始業式の定番、自己紹介が行われている。近年は名簿順に関し色々意見があるようであるが、結局はひらがな順で行われる事が多いそうだ。IS学園でもその例に漏れずその順で、早々に相川さんが自己紹介をしていた。

それはともかくと、暫く前にクラスに來た壇上の女性2人に目をやる。担任のディアナ・リーブス先生と副担任の小林千代実先生である。金髪碧眼、淡い桃色のワンピースでゆったりした出で立ちのリーブス先生に対し、濃紺のパンツスーツで黒い髪を後ろで1つにまとめ隙の無いのが小林先生だ。2人とも髪が長いこと以外類似点がない、随分と対照的な2人である。

私はその彼女らとこれが初対面では無い。今から1年程前ちょうど今時分だろうか。私は短い間であるが、とある理由でこのIS学園に滞在していたことがあった。その時彼女らと面識を得たのである。滞在と言っても事実上軟禁状態ではあった事は付け加えておく。当時のことを思い出すと、あの2人が担任とは喜んで良いのか嘆くべきか判断に悩むところだ。小林先生はともかく私はリーブス先生を多少苦手としていた。特に何かされたという訳では無いが、とにかく調子を崩されるのである。

それにしても先程から隣が随分と騒がしい。1組であろうか。

タブレットを見ながら彼女が「次は真ちゃんね。自己紹介なさい。

「と促した。リーブス先生は多少苦手なのである。いくら何でもちゃん付けは無いのでは無いか。抗議したところで聞き入れて貰えぬ事は身に染みている。はいと、喉まで出かかった不平を飲み込み私は立ち上がった。」

皆の視線が集まるが最初よりは随分と視線が柔らかい事に安堵を覚える。苦勞の賜である。後ろから真君がんばれーと激励が聞こえた。

「蒼月真です。皆さんご存じかも知れませんが男の適正者で2人目の方です。」

織斑君が良かったー、残念ー等々感想が声が聞こえる。鷹月さんと布仏さんも心なしが表情が硬い。失敬だな君ら。小林先生が咳払いで彼女らを注意する。

「メディアでは随分と騒がれましたがISに関しては初心者同然です。既に勉強を始めている皆さんには及びません。」

あれ意外にまじめ？と鷹月さんが私を見上げている。よし、彼女には後ほど念入りに念を押す。

「とは言え、ここい居る以上全力で取り組みたいと思います。色々あるかも知れませんが皆さん1年間よろしく願います。」

ふと気づけばクラス中が静まりかえっていた。鷹月さんはぼうと見ているし、布仏さんはきよんとしている。はて、何かおかしいところが合っただろうか。小林先生はうんうん頷いている。特におかしいところは無さそうであるが。

「真ちゃん、自己紹介にしてはまじめ過ぎかしら。」

「先生、俺は真面目なんです。」

「折角の男の子なのだから、そうね、好きな女の子のタイプとか答

えて貰おうかしら？」

何故そうなるのか。私の話を聞いて貰いたいのだが。それよりも何故そのような事を答えねばならないのか。

クラス中の少女らがその目を爛々とさせながら私を見ている。そうか、好きなのだなその手の話が。IS学園の生徒といえども変わらないのだな。小林先生に救いの手を求めるが、あからさまに逸らされてしまった。彼女達の期待に満ちた眼を見る。逃げる事は難しそうだ。

腹を括るにしても一体どうしたものだろう。下手に答えては後々禍根を残しかねない。誰もが納得する普遍的な女性・・・一瞬あの人を浮かべてそれを言うのやめた。リース先生がにこやかに私を見ている。これが狙いか。流石に他所の担任の名を上げるのは適切で無い。かと言ってリースの名を出すのは後々恐ろしい。

思案の後私は「裏表の無い素敵な人です」とどうとでも取れるように答えた。

「えー男らしくないー」や「サイテー」、わいわいがやがや言われない放題であった。理不尽である。

ここまでにしておきましょ、と不満顔なリース先生を私は抑えてそれと、続けた。1つ彼女らに伝えておかねばならない事がある。機会としては今が適切であろうと思った。先生が何か言うかも知れないが、いずれ知れることだ。問題ない。

「それと私は皆さんより1歳上の16歳です。僅かですが社会人経験もありますので悩み事があれば気兼ねなく相談してください。」

「えーーーーー！」

一拍の後彼女らの大合唱が響いた。君ら隣クラスに迷惑だぞ。

「うそ・・・」鷹月さんが呆然としている。

「と、年上？」「信じらんない」「言われてみれば・・・」等々感想

が聞こえる。

真君はおにーさんだった・・と流石の布仏さんも驚きを隠せないようだ。そんなに幼く見たのだろうか。小林先生が予想通り睨んでいる。リース先生は予想通りあらあらと笑っていた。

ふと視線を感じそちらを見ると我に返った鷹月さんであつた。目が口程にもの言う彼女は彼女はただ一言こつ言つた。

「蒼月君、留年したの？」

失敬な娘である。

## 01-03 出会いと再会

1限目の後、最初の勤めから解放された私は、ノートを見直す暇無く彼女らから質問攻めを受けていた。

「ほんとびっくりしたよ。真く．．先輩」

「年上でも同学年なんだ。気にしないでくれると助かる。」

「なら、そうさせてもらおうかな。」

「というより、敬語は舌噛みそうだしな。布仏は。」

「真くん、それひどいー。」

私たちのやりとりで鷹月さんがくすくす笑っている。年齢のカミングアウト。博打では無いかと内心心配であったが上手くいったようだ。他のクラスメイトからも眼を背けられるような事は無くなっている。

意外な事だが、仕事に強い関心を持ったのは布仏さんであった。

IS機械関連と知るや否やすごい食いつきで、本当に意外だ。布仏さんは機械に興味があるのだろうか。奇特的な娘である。考えればまだ彼女らの事を殆ど知らない。そろそろ私から質問したいところではあるが、まあ追々で良からう。

一呼吸の後、互いに言葉を交わす彼女ら2人を見る。鷹月さんと布仏さん。あの出来事から数時間しか経っていないはずだがここまでの道のりの長い事。本当に一時はどうなる事かと思ったが、大げさにも実は夢では無いかと疑ってしまう。

どうしたの、と鷹月さんが不思議そうな顔で私を見てきた。随分と柔らかい表情だ。先程の視線の中にこの2人のものもあつたのだ。今の彼女らのと比べるととても同一とは思えん。そんな私の感傷に

彼女らは実にあっけらかんとしていた。だつてねえ、と眼を合わせ同意を確認する2人。

「なんだよ。はっきり言えよ。」

「ちよつとこわいかなーって思うよ。」

「怖いって、俺が？どこが？」

「特に目付き。はいこれ。」

鷹月さんが差し出した折りたたみ式の手鏡で自分の顔を見る。黒髪、黒眼・・・特に変わったところは無いと思うのだが。多少釣り眼とは思っけれども。そういうえば営業の垣田さんに営業は駄目だとか言われたが、そういう意味だったのだろうか。それにしても彼女らは随分と酷い事を言っておらんか。

「そりゃー織斑一夏より爽やかとは言わんけどさー・・・」

織斑・・・失念していた。

「2人ともスマン、1組行ってくるわ。」

「1組？」

急に立ち上がった私に少し驚いた顔で鷹月さんが聞いてきた。

「織斑一夏に会ってくる。」

私はどちらかと言えば人混みを苦手としていた。その多さ故にその人物を注意するべきかどうかの判断が困難だからである。何故注意する必要があるのかと聞かれると回答に困るのだが、とにかくそうしてしまうのである。今でこそ大分落ち着いたのだが以前は町を歩く事すら難儀であった。物陰伝いで移動する、すぐ人の死角に移る、会社のおやつさんにお前は忍者か？と殴られたのはそれ程古い



記憶では無い。

話が外れたが、私が言いたい事はつまりこうだ。廊下に溢れんばかりの、人、ひと、ヒト、ごった返していた。姦しいにも程が無かるうか。

「なんだこれ。」

「皆おりむーを見に来ているんだよー」

意図せず口から漏れた感想に布仏さんが説明してくれた。彼女らは皆一様に1組の中を覗いている。面白そうだからと付いてきた布仏さんも少々あきれ顔だ。鷹月さんは興味が無いからと来なかった。因みにおりむーというのは織斑の事らしい。

「上級生も混じってるな。猫も杓子も織斑か。妬けるねえ。」

見れば2組の生徒も見かける。妙にクラスが閑散としていたのはこういう理由であったか。織斑一夏の人気具合が分かうと言うものだ。かくいう私はどうかと言うと、あ、と近寄るが織斑でない事が知れるとそのまま立ち去られてしまう。

まだ見ぬ織斑に妙な対抗心を燃やした私は、丁度通りかかった眼鏡の娘におはようと声を掛けると足早に逃げられた。

「真くん、女の子を怖がらせちゃ駄目だと思っよ。」

今の私の心境をどのようにしたらこの温和な少女に伝えられるだろうか。

私は人混みを押しのけ何とか1組に入ろうと悪戦苦闘していた。彼女たちはクラスの中に注目している為なかなか気づいて貰えないのだ。一度無理に押し通ろうとしたのだが、彼女らの感触があまりにも困惑的であつた為諦めた。変質者扱いされると厄介な訳で、決してその時の布仏さんに気圧されて断念した訳では無い。

とは言えここでじっとしている訳にも行かず、

「ねえねえ彼が噂の男子だつて」 「ごめん道開けてくれ。」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」 「道開けてくれないと、」  
「やっぱり彼も強いのかな？」 「触っちゃうぜ。」

瞬間人垣がざつと2つに割れ道が出来た。狙い通りである。だが布仏さん、その賛辞は辛いから遠慮してくれると助かる。

とにかく織斑を確認しようと、丁度鉢合わせた背の高い少女に取り次ぎを頼んだ。すると、どう言う訳かその少女はえらい剣幕で私を睨んでくるのである。はて何か彼女の気に障る事をしたのだろうか。彼女とは少なくとも初対面の筈である。今のやりとりにおかしいところも見当たらない。

「筈、どうしたんだ？」

少女の態度について思案していた時、その声は発せられた。それは少女の後ろからであり、そしてそれは男の声だった。そいつはそこに居た。そいつは私と同じ黒髪、黒眼、背格好も私と同じぐらいか。ネットで見た画像の通り、間違いない。そいつはあの織斑一夏だった。

向こうも私に気づいた様で連れの少女を脇に促し鼻先に歩いてくる。なるほど随分と良い面構えをしている。女子が騒ぐのも分かるうと言うものだ。私も織斑を背筋を正し見定めた。

「織斑一夏で間違いないな？」

「蒼月真だな？」

互いが回答を待たずに続ける。もとより期待などしていない。

「ようやくご対面だな。随分と探した、織斑。」

「それはこっちの台詞だぜ蒼月」

織斑の顔を見える。織斑もまた私を見返していた。私たちの放つ一触即発の雰囲気、あれほど騒がしかった周りが静まりかえっている。空調の動作音が聞こえる。私が踏み出すと同時に織斑も踏み出した。誰かが固唾を飲み込んだ。

そして私たちは

「「幽霊じゃ無い！」」

互いに両手で肩をつかみつつ、その存在を噛みしめる。声か音がよく解らないが教室に大きな音が鳴ったと思えば、見渡す女子達はその姿勢を崩していた。何があったのか。だが今はそれどころで無い。

「いやー、やっと会えたな蒼月。本当は居ないんじゃないかと不安だったんだぜ。」

「俺もだよ。入学式から探しても見つからなかったからな。」

男だ。男である。自分以外のもう一人の男。自分でも意外な程、興奮しているのが分かる。誰に何度聞いても要領を得なかったもう一人の、織斑一夏がこうして目の前に居るのである。誰が責められようか。

「しかし良かった。本当に良かった。1人じゃ無いんだな俺。」眼に涙を浮かべた織斑の肩に手を掛け「わかる、わかる。そうだよな。最初はどのような事かと思ったよな。」私も今朝を思い出し涙ぐんだ。

「蒼月真。2組。よろしく頼む。」

「織斑一夏。ご覧の通り1組だ。堅苦しいのは苦手でさ、一夏でいい。」

「なら俺も真で頼む。」

改めてしっかり握手を交わす。これがこいつ、一夏との出会いだった。後になって思えば随分と締まらない出会いだったと思う。

周囲の冷たい視線に気づいたのか一夏が多少顔を赤くしながら聞いてきた。

「ところでさ真、入学式どこに居たんだよ。俺も探したんだぜ。」

「ああ最後尾の一番左でな。とても寒かったよ。」

「何でそんなところなんだよ。」

「偉い人に聞いてくれ。そう言う一夏はどこだったんだ?」

「最前列の一番右。」

「V i p席だな・・・。」

入学式は体育館を一時的に式場にする歴史ある方法で行われた。大量の折りたたみ椅子を並べる方法である。その私の席は下座も良いところだった。監視カメラの数台が死角になる席であった上に、窓から建物が見えた。幸いにも人影は見えなかったが、学園が私をどう扱っているかよく分かるものだ。

ふとあの人の顔が浮かんだ。そうだな、厳しいあの人がそういう事を良しとしないのは確信を持てる。例えそうで無かったとしても、あの人に助けられた命だ。役に立つならそれも良からう。

「何でそんなに離れてるんだよ。隣にすれば良いのに。そもそもクラスだってさ何で別にするんだか。」

「お前らがつるんで悪さしないようにだ、馬鹿者ども。」

出かかった私の答えを遮ったのは、あの人の声だった。絶対に忘れる事の無い、あの人の声だった。

「千冬さん？」

「織斑先生だ」

振り返りざま、痛みの生じた頭をさすりつつ彼女を見た。彼女は黒のスーツに黒のタイトスカートをまとい、仁王の如く立っていた。その美しくも恐ろしい姿は何者も抗いがたく、尊大にして傲慢。そして何よりも優しい。私の知る彼女がそこに居た。

状況が理解できないのか一夏が何度も彼女と私を交互に見やっている。

「予鈴はなっただぞ、クラスに戻れ蒼月。」

右手の帳簿を振りつつ指示する彼女に、はいと答え1組を出た。  
一夏に後でと去り際伝える。布仏さんも廊下の女生徒もいつの間にか居なくなっていた。

そうか、あなたは1組の担任か。近くなく遠くなくですか。千冬さん。

### 01・03 出会いと再会（後書き）

物語時間ではまだ1限目後。

中盤の一夏とのやりとりは敢えて詳しくしました。

ご意見あればください。

次回から展開速度を上げる予定です。

2011/12/26 一夏、千冬登場の前後を直しました。

「大丈夫か。」

曖昧な当時のことで私に向けられたこの声だけは今でも鮮明に覚えていて。その声の主は織斑千冬。それが彼女と私の最初だ。

約1年前の今頃、私はIS学園で保護された。と言っても当初の記憶は曖昧で殆ど覚えておらず、明瞭となったのはだいぶん後になつてからであつた。だから最初の頃は大半が彼女からの聞きづてになる。

聞くところによると私はアリーナ近くの茂みに全裸で倒れていたらしい。体中血がこびり付いていたそうだが不思議と怪我は無く、頭髮、眉毛など体毛が薄毛でまるで、生まれたての赤子ようだったと彼女は言っていた。

私は自分に関する記憶を失っていたが、幸いにも理知と言葉は残っていた。ただ私の持つ世間常識が微妙にずれていたのは奇妙な事であつた。記憶障害よるものらしいが実際のことは分からない。

当初学園は国の施設に預けようとした。私は身分を明かす物は無く、更には国民登録も無かつたためである。仮に私が学園の立場であれば同じ様にするだろう。ところが彼女がが調査を強く申し出たため暫く学園に滞在することになった。

その調査の途中、偶然にもIS適正があることが判明したのである。学園内は大騒ぎとなつた。それまでの常識、男には使えないと言う事実が覆されたのであるから、無理も無い事だとは思ふ。尚、これは男の適正者第1号は織斑一夏では無く私と言うことを意味す



る。念のため断っておきたいが、私は順位に執着していない。

当初学園側は世間への影響を考え秘匿とするつもりでいた。私も騒がれる事はよしとしなかった為、渡りに船とそれに応じた。ただその対価として自活する手配を求めた。学園もそれに応じ、私に日本国籍と自活を始められる当面の資金を用意、社会適応できるように訓練する事になった。

それから2ヶ月後、私は学園からそれ程遠くないところに居を構え地元の中小企業で働き始める。近くになったのは学園の顔が聞く企業が多いというのもあったが、彼女の希望でもあった。私は不思議に思ったが、他ならず恩人であるその人の意向を受け入れた。

その会社は町工場であつたが技術力が高く学園からの部品・装置の受注や共同開発を行っていた。部分的ではあつたが私もそれに携わり学園には幾度となく訪れた。私が入学間もないにも関わらずIS学園に通じているのはその為である。

互いに多忙の身であつたが、彼女とはそれなりに連絡を取り合っていた。退屈だが平穩なこの生活がずっと続くのであろう、と疑いもしなかった。

年が明けて暫く仕事にも慣れ始めたかという頃である。織斑一夏が、男の適正者として世間に知られたのである。その世間の騒ぎようは凄まじく彼が静かな人生を送ることは想像難くなかった。その時には彼が彼女の弟である事は既に知っていた。流石の彼女も動揺を隠せないでいたようだった、電話越しでも彼女の動揺を感じ取れた。恩人を、彼女を支えられない自分が齒がゆかった。

そして私も世間に知られた。学園の情報セキュリティを全て洗い

直したそうだが、何故情報が漏れたのか結局説明できていない。私の場合発見から公表まで間が合った事が事態を複雑な事にした。私の保証人となった彼女の負担は想像に難くない。彼女には何度も謝罪したが、気にするなと言わなかった。

告白しよう。私は公表された事に感謝している。彼女の側に居られるのだ。これでようやく彼女に報いる事が出来る。これが恋なのか恩義なのかは知らない。

だがそれで十分だろうと思う。

## 01-04 過去（後書き）

進展するとか言っておいて、全く進みませんでした。  
申し訳ないです。

ただこの話はここに入れるが一番適切かと思いました。

それと一気にアクセス増えて腰抜かしております。

読んで下さった方、ありがとうございます。宜しければ引き続きお  
つきあい下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3504z/>

---

HEROES インフィニット・ストラトス

2011年12月27日22時53分発行